

特別
対談

西中千人

×
ロッセツラ
メネガッツォ

多元化する工芸について

西中 ロッセツラさんはADI Design Museum（イタリア・ミラノ）で開催された「Origin of Simplicity : 20Visions of Japanese Design」を企画され、私の作品も展示していただきました。私を含む日本の工芸的な表現は、イタリアをはじめとするヨーロッパでどのように捉えられたのでしょうか？

メネガッツォ 難しい質問ですね。

日本の工芸やデザインなどへの私の関心は、ある疑問から始まりました。世界中の人たちが日本の美術品（特に工芸やデザイン）を見た時に、なぜ特別な魅力を感じるのか、と。ADIの展示では200点ほどの作品を「マテリアル」「テーマ」「キーワード」ごとに分類し展示しました。来場者の方々は展示を見て、日本の美術品に心惹かれていましたが、その魅力について私たちも十分に説明することはできませんでした。かろうじて「Simplicity」あるいは「Essential」といったキーワードの提示に結実したと思います。言葉の意味は文化ごとに異なりますので、西中さんはこのキーワードに私とは違うものを連想されると思いますけれど。

西中 ロッセツラさんはキーワードを元にして、作品のマテリアルとか技術に視線を誘導し「Simplicity」の意味を探るように日本の作品を展示してくださいだったのでですね。日本の「色」についてまとめた書籍も刊行されていますが、これも似たような意識で取り組まれたのでしょうか？

メネガッツォ 日本の色の「名前」に魅力を感じました。名前に使われる漢字を道しるべにしてルーツを辿れますね。日本の色を調べる中で驚いたことがあります。「名前」とそれが実際に指し示す「色の実相」が、想像以上に多岐にわたっていました。もちろんイタリアの文化にも様々な色相があり、「ボンペイの赤」と「ベネチアの赤」は異なります。しかし日本の色は厳密に分けられているというよりも、色の概念が曖昧な気がします。日本の伝統的な色については様々な書籍を調べましたが、書籍ごとにサンプルとして載っている色の見本が違いました。私には幽霊を捕まえるような作業でした。実際の色合いとそれを言い表す名前は、日本では巨大なファミリーのようになっているのですね。西洋の色の捉え方と日本のそれはかなり違い、日本の場合は色の重なり合いが基準になっているのではないのでしょうか。色の地平がかなり広いですね。

西中 文化が違えば、見え方も意味合いも異なるということですね。食事ひとつとっても、ワンプレート料理に慣れている海外の方が小皿がたくさん並ぶ日本料理に疲れてしまうと聞いたこともあります。でもその違いを越えて、日本の工芸的な表現が魅力的に捉えられているというのは興味深いことです。最近では「金継ぎ」が海外でブームだと耳にし



にしな・ゆきと 1964年和歌山県生まれ。88年星薬科大学薬学部卒業。91~94年カリフォルニア美術大学。97年現代ガラスの美展IN薩摩大賞。2020年ワールドメディアフェスティバル(ドイツ)金賞。21年CrQlr Awardsパーキュラーエナジー賞。主なパブリックコレクションにヴィクトリア&アルバート博物館(イギリス)やオックスフォード大学アシュモレアン博物館(イギリス)、オーストリア応用美術博物館(MAK)など。

EXHIBITION INFORMATION

西中千人展
5/21~27: JR名古屋タカシマヤ
6/18~23: 日本橋高島屋S.C.
9/25~30: 金沢香林坊大和
12/11~17: 大分トキハ百貨店

したが、どうなんですか？

メネガッツォ 大ブームです。イタリアのどの本屋にも専門の棚が設けられています。ただ、日本における認識とは違った意味合いで金継ぎが海外で広まっていると思います。例えば、病氣や怪我を治そうとしている人が金継ぎについて知りたがる、といった観念的な事柄として扱われています。金継ぎは壊れてしまったものをつなぎ合わせて、もう一度美しいものに生まれ変わらせる芸術だと思えますが、その美学が身体的な健康や生命の事柄の問題に引用されているようです。振り返れば、「WABISABI」(侘び寂び)や「RAKU」(樂)が海外で広がったのも同じような形でした。最近だと、短い詩のことを「HAIKU」(俳句)と言ったり、建築家やデザイナーたちが好んで「KIGAI」(生き甲斐)という言葉を使います。私は何度も来日していますが、いまだに日本の中で「生き甲斐」という言葉を聞いた

ことがありません。他にも、日本のアニメーションや漫画、文学、コスプレ文化の人氣が高まっています。こうした広がり方を見ると、「ニュージャポニズム」の時代だと思われれます。あるいは、「セルフジャポニスム」(セルフ・Japanism)と言えるかもしれません。とはいえ、異文化の中に意味合いで広まって需要されることは元々の文化に対する視線を養う大事な要素だと思えますし、その差異を認識することは、発祥元の文化にとっても有益だと思えます。

西中 まさか「生き甲斐」が流行っているとは想像もしませんでした。ロッセラさんの仰るとおり、違った意味合いになって広まることで、逆に理解が深まることにもあり得ますね。金継ぎがまだ海外には広く知られていなかった時代にNYで展示をしたことがあります。私の「呼継」というガラスの破片を繋ぎ合わせた作品を見た現地の人に「フォンタナみたいだな」と言われたんです。それに対して「日本では400年以上前からひび割れを強調するように修復して見せる文化があるんですよ」と話をしたら、その方はびっくりされて「日本文化はとても保守的(conservative)で、精密なものというイメージがあるが、割ってしまうというのは正しいのか？」とおっしゃったんです。その時、価値観や判断基準が大きく違うことを実感しましたね。

メネガッツォ 思い出しましたが、日

本の色に関する書籍を作ったのも、日本の色に対する世界のイメージを広げるためでもありました。日本のことを「モノクロの文化」と思っている人は少なくありません。禅の思想から連想される「墨の世界」だと思っているんです。でも平安時代の十二単や歌舞伎の衣装を見れば、日本における色の文化の深さが、世界の人にも通じると思えました。

話を戻すと、別の文化への入口は意味合いの変化から始まります。世間の人たちが大まかな意味合いを受容して、それがポピュラーになって、ポップカルチャーに浸透して、その先に、深く勉強したいという人が出てきます。こうした文化の派生の仕方は今に始まったことではなく、19世紀のジャポニスムもそうでした。着物を見れば真似で着ることから始まっていましたから。

西中 そうやって文化の裾野が広がったからこそ、自分の主張を伝えやすくなるんですね。金継ぎも、ちょっと怪しいものを見かけるようになったくらい海外で一般化しました。私はそこに、日本の工芸的な表現が、イタリアやヨーロッパ全体にそれまでになか



呼継「碧炎」
2025年
H36×W44
×D36cm

ったような刺激を生み出していると思うわけです。私の「呼継」作品を見たお客様が「自分の気持ちも、長いこと生きていると何度も砕け散りそうになってきた。しかし、だからこそ、強くなることができたし、人間的な魅力も生まれたのだと思う」とおっしゃいます。これはまさに、私が「呼継」シリーズを通して訴えかけたい価値観であり、安土・桃山時代に隆盛を極めた茶の湯、あるいは禅の文化のメッセージ性でもあると考えます。あの時代に、なぜひび割れをあえて見せることが生まれたのか。禅の教えのもとでは、人間も草花も犬もすべて等しくなる。何物も死から逃れることはできない。命あって生きる時間は短い。儂い現世の

Rossella Menegazzo (ロッセッラ・メネガッツォ) ミラノ大学准教授、東アジア美術史博士号。2025年大阪関西万博イタリア共和国文化教育サイエンス担当。イタリア国内・国外で浮世絵や、日本のグラフィック・デザインと写真についてのキュレーションを複数手掛ける。主な著書に『IWA: The Essence of Japanese Design』(Phaidon Press, 2014年)、『Iro: The Essence of Colour in Japanese Design』(Phaidon Press, 2022年) など。



輝きを見る／見せるために、彼らはあえてひび割れに目を向けた。影を見て光を知るように、ひび割れを見て命の輝きを感じ取ったのだと思います。

メネガッツォ 素敵ですね。文化だけでなく、歴史的発展も違いますね。ヨーロッパは「意志」の積み重ねで文化を作り上げました。でも日本の文化や環境、生活を知ると、それとは異なる文化的・思想的発展もあることを理解します。この対談の前に京都の「哲学の道」を散策させてもらいましたが、人間にも建物にもマテリアルにも環境にも「終わり」がある気配を感じ取ったような気がします。そういった事柄も表現や作品に影響しますよね。

日本の工芸を調べていくと、昔の教えでは形やバランス、使い方に合わせる完成形を目指す制作が説かれていました。それが長く続く工芸の歴史ですね。しかし最近の若い人たちの仕事を見ると、もちろん作品や形

のことを気にしているけれど、それが中心にはなっておらず、むしろ形になる前のアクションや制作のプロセス、マテリアルと人間の関係性が重要事項になっていますね。人間と環境のバランスが以前とは大きく変わった社会に生きて、物の使い方を換え、技術よりもマテリアルの新しい実験を試みてみたいという意識が強くなったのでしょうかね。

西中 海外の方々の作品に対する見方には、思想的な部分への関心が強い。工芸的な表現を志す作家がどんな海外へ進出していますか、国内で得られる反応との違いを柔軟に受け止めたいですね。

メネガッツォ 見方はもちろん、制作のプロセスも真逆だと感じます。イタリアでは、大きなアイデアを思考する事から始めて作品の細部へ収束していく制作がほとんどです。日本の場合は、作品の細かな部分からスタートして全体へ広がる印象です。単純に芸術の問題というよりも、人間と神様の関係の違いも影響しているのでしょうか。

西中 人間と環境、人間と神様といった抽象的な事柄こそ、各文化の、各々の表現の根底にあるべきものだと思います。芸術も、哲学もすべて、人間が生きている／生きなくてはいけないという前提で営まれる。それぞれがこの地球に生きる人間であると認識して、文化を味わって欲しいです。

メネガッツォ 「生き甲斐」という言葉がイタリアで流行っている背景にも、生きることの指針を求めようとしている現代社会が見えてきます。展示をキュレーションすると、展示した作家さんから「自分の作品が違ったように見えてくる」と感想をもらうことがあります。日本の工芸的表現に文化を越えた反応が寄せられている昨今、これまで接点の無かったものたちとリレーションを結び、もつともつと広い「正解」が工芸に生まれるかもしれませんね。

西中 日本の伝統で度々言及される「守破離」とは、歴史を学び(守)、その殻を壊す(破)先に、自分だけのオリジナリティーが生まれる(離)ことを指します。この3つのどれもが大事なんですが、やはり芸術の創造は「自分」の存在を掴むこと無くしてはあり得ないと思います。自分があるからこそ、前例のない形や表現が、いずれ人の心を驚嘆みにする。金継ぎだって、これを始めた人はもしかしたら世間からは偏屈に思われていたかもしれない。でも結果的に、金継ぎは400年以上の時を越えて愛されている。私も自分の表現が誰かに響くことを願うからこそ、



呼継「創世」
2025年
H37.0×W29.5
×D29.0cm

世界に出てガチンコ勝負をしなくちゃいけないと、自分に問いかけるんです。

メネガッツォ 日本の工芸は長らく「伝統を守ろう」と言いますが、その言葉が実は障壁になってしまいがちですね。時代ごとの表現を生み出せるかどうかこそ、伝統の継承にとって大事ですね。

西中 そうですね。京都の街並みを見ても、守ってきたからこそ残っているものは確かにあります。でも今見える京都の街並みは「過去」ではない。伝統からパンクを生み出したロンドンのように、私たちは私たちの過去から次なる文化を生み出さなくては行けない。自分の表現はそこに向かっていたいのですし、100年後に「あいつ、ろくでもないことしたな」と言ってもらえるようなことを成し遂げたいと、強く望みます。